

## 令和6年能登半島地震の被害に伴う 被災地支援を通じて

びわこ学園医療福祉センター野洲 生活支援員／豊福 真司



元日に発生しました能登半島地震につきましては、日々TVで被害状況や様子が取り上げられておりますが、びわこ学園にも滋賀県や滋賀県知的ハンディをもつ人の福祉協会（知ハン協）を通して福祉施設への応援派遣の依頼がありました。

そこで、6月に加賀市にある錦城学園という障害者支援施設へ派遣職員として応援に行かせて頂きました。ここでは能登半島の穴水町にある精育園という被災施設から避難されている方達が1棟を借りて3月から避難生活を過ごされており、短い間ですが被災された方々の日常のお手伝いをさせて頂きました。

応援先となる加賀市は、施設や町並みは直接の被災地域では無かったのでニュースで聞くような凄惨な被害の様子を目の当たりにした訳ではありませんでしたし、避難されている利用者様たちは、元々の施設でいつもされていた仕事ができないことから、リビングでテレビを見るなど皆さんでゆったりと過ごされていました。

穏やかな避難生活の中を共に居させて頂きましたが、そこで働いている職員さん達も元々は被災された能登半

## 『医療的ケア児等学校保育医療福祉連携体制構築に向けた取り組み』 ～開設から2年目を迎えて～

滋賀県重症心身障害児者・医療的ケア児等支援センターこあゆ 相談支援専門員／園田 千鶴



滋賀県重症心身障害児者・医療的ケア児等支援センターこあゆも2年目を迎え、今年度重点的に取り組んでいることのひとつが『医療的ケア児等学校保育医療福祉連携体制構築に向けた取り組み』です。現在、市教育委員会と学校長にこの取り組みについてご理解いただいた学校を対象に『モデル的』に取り組んでいます。

今回は、先天性中枢性低換気症候群の疾患（気管切開術施行、適宜、人工呼吸器管理必要）がある地域の小学校に在籍するAさんのケースをご紹介します。Aさんのバックアッププランのニーズは、『安全にかつ楽しく水泳の授業を実施したい』と学校看護師や教員より挙げられました。そこで、そのニーズに応じたプランを作

成し、主治医の同席のもと学校の水泳の授業を実施しました。小学1、2年生の水泳授業の課題は、『水に慣れること』。他生徒さんは、プールに顔をつけるなどの取り組みをされていました。医師より「Aさんも顔をつけることができないかな」の言葉により、初めて学校のプールに入るだけでなく、水面に顔をつけることにもチャレンジできました。

現時点で、この取り組みに対する公的な特別な予算はなく、制度的な裏付けもありません。しかし、このような「しくみ」が必要です。医療的ケアを必要とする児童の教育保障の課題は多岐多様です。この課題を解決していくためには、教育分野、医療分野、福祉分野などの多職種が、各々の分野の専門性を互いに認め合い、理解し、医療的ケア児やその家族を支える者として、課題だけでなく『喜び』なども含めて共感しながら、共考し、役割分担しながら、具体的に実働していくことが大切です。今後もその繋がりを強化するとともに一役を担えるように取り組んでいきたいと思っております。



島方面に住まわれており、今回の避難を通じて利用者さん達と同様に加賀近辺まで移住してお仕事されている方ばかりでした。

「輪島や能登半島の方は道路も何も全く直っていない」、「元々住んでいた輪島の家の土地は瓦礫だらけになっているけど、今住んでるここ(加賀市)からは車でも片道4時間程かかるからなかなか輪島の家を見に行く事もできない」という深刻なお話を職員さんから伺いました。また、私達派遣職員に対して笑顔で色々と話しかけてくださる陽気な利用者さんとお話している中では、

「こっち(避難先である錦城学園)の方が良い」と話される理由を

私が聞いた時に「(被害にあった精育園は)地震、怖い〜」と答えてくださったその苦笑いのような表情には言葉に詰まるようなとても複雑な気持ちになったことは、今でも覚えています。

利用者さんも職員さんも、私には想像出来ないような辛い想いや葛藤があったのだらうと思いますが、職員さんは私達派遣職員に笑顔で世間話をしてくださったり、利用者さん達も私達を好意的に迎えてくださりながら、利用者さん同士で楽しそうに過ごされている姿を見て、人間の強さや優しさを感じる事のできた貴重な体験でした。今回関わらせて頂いた精育園の皆様は元より、今回被害に遭われた石川、能登半島地方の方々「あの日までの日常」が戻ってくるよう、復興が進むことを祈るばかりです。



## 「抱え上げない介護」推進事業所に推奨されて

知的障害児者地域生活支援センター・さくらはうす 生活支援員／堀尾 成史

さくらはうすは、2023年に滋賀県社会福祉協議会から滋賀県の障害分野の事業所では初めて「抱え上げない介護」推進事業所に推奨されました。

「抱え上げない介護」は、対象者の状態に合わせた福祉機器等の活用だけでなく、身体への負担が少ない環境作りや、ボディメカニクスを取り入れて介護時の身体の間違った使い方をなくすことで、利用者さんと介護者の双方にとって安心で安全な介護を提供し、利用者さんの可能性を広げることです。

さくらはうすでは、①事業所内で学習会を行う、②他事業所を対象に研修会を実施する、③職場体験に来た中学生や実習の大学生に福祉用具体験を行う、などに取り組んできました。今後も、推進事業所として、地域の事業所やご家族にも知っていただけるよう報告会や研修会を行っていきたいと考えています。



## 「ちょこらんどの6年のあしあと」 前編

びわこ学園障害者支援センター・多機能型事業所ちょこらんど  
看護師/多久島 尚美

多機能型事業所「ちょこらんど」は、平成30年2月1日に草津市笠山で訪問看護ステーション「ちょこれーと。」に併設して開所しました。開所からすでに6年が経過し、児童発達支援を受けていた年少の子どもたちも、今では就学し、元気に放課後等デイサービスに通っています。

令和6年度の登録数は、就学前の児童9名（1歳児～）、放課後等デイサービスの児童が13名（学齢児）、保育所等訪問の児童9名となっています。それぞれ経管栄養、気管切開や人工呼吸器装着など医療的ケアがあり、重症心身障害の認定を持っておられます。

開所当初を振り返ると、インフルエンザの猛威により初日から登園ができないという状況がありました。2年目以降は新型コロナウイルスの影響でクラスター予防に多くのエネルギーを費やすことになり、スタッフも子どもたちも苦しい経験をしました。参観やお出かけもできず、お家で楽しんでもらうために「ちょこらんどチャンネル」をYouTube配信した時期もありました。

その騒動にも負けず、子どもたちはすくすく成長されて、初めての登園では泣いていた年少の子どもたちも、次第に母子分離ができるようになり、スタッフや友だちと楽しく過ごせるようになりました。最初は心配されていたお母さんたちも、今では「ちょこらんど」での楽しい様子を見て安心して預けてくださるようになりました。これには、訪問看護師が「ちょこらんど」を兼務していることも信頼関係を維持する上で大きいかなと感じています。

今回は、「命と安全を守る支援と子どもたちの成長」をご紹介します。

